

定雅の号と移居

田邊 菜穂子^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【キーワード】

西村定雅 近世文学 京都俳壇 俳仙堂 椿花亭 東山 双林寺

はじめに

明治三五年一月号『ホトトギス』にて、水落露石氏は定雅について次のごとく紹介した。

定雅は姓を西村通稱をみすや甚三郎と呼び、京都三條柳馬場に住し、縫針を以て業とす、俳人として世に立つに至りしは盖し中年以後のことなるべし。後眞葛が原に居を撰びて自ら俳仙堂と稱しき、椿華亭は彼が別號なり。彼又隨筆粹か川の著ありてより粹川翁と稱せりといふ。

〔西村定雅〕

これを皮切りとして、藤井乙男（紫影）、中村俊定、高木蒼梧¹各氏により、主として俳諧に関する定雅の著作やその生涯が、少しずつではあるが示され、定雅は次第に世に知られるようになってきた。そして昭和四九年、浅野三平氏はそれまであまり言及されなかった「小説を主とする文学者としての面」に焦点を当て、「西村粹川子」²

と題した一文を発表された。さてこれら先行研究の中には、定雅の住んだ場所についての記載も当然見られるが、その時期や場所の特定に関して細叙されることはなかった。

そこで本稿では、定雅の居所とその移動時期について俳諧資料、地誌等を用いて探りたい。なおその際、社号や住居につけられた号（亭号・庵号など）を手掛かりとするが、屋号の類が俳号のかわりとして用いられる時もあり、論中で「俳号」や「庵号」などと一々断れば煩雑になってゆく。従って、特に必要のない場合にはこれらを区別せず、単に「号」と表すことにする。

一、岱月楼と白梅楼

定雅が兄美角の一周忌追善集『はなこのみ』を編んだのは、天明元年（一七八一）のことである³。美角の生前、兄弟がともに俳諧に遊んだことは『はなこのみ』に寄せられた几童跋文のほかに、同時代の資料より窺知されるところで、この頃の定雅の詠句は兄の句のそばに並んで載せられることが多かった⁴。こうした関係にあった兄を失い、その追善句を編んだものが最初の編著となろうとは、定雅は夢にも思わなかったことだろう。さて『はなこのみ』の中の定雅による追善句は以下の通り⁵。

このかみなる美角、かり初にいたはりしより終に枯薄の哀を世のかきりとはなしぬ。されは、日を三日過てつく／＼春の夢、と其日を忘れし。此身のうらみもはや一とせのむかしとはなりけるにそ。友とち誰かれの人／＼を儲けをして且追悼の吟を乞、あるは折／＼の風流を拾ひて粹にちりはめ、いさ、か爰にかの亡兄か魂をなくさむる事とはなりぬ

塚前

花好み果を極のあるし哉

榊下社 定雅

ここには「榊下社 定雅」とあり、社名が記されている。「はなこのみ」には一周忌の歌仙が一卷収められており、そこにもまた「榊下社友」として、定雅・志齊・古春・柳女・季柳・里童・嵐川の連句が収められる。「榊下社」は『はなこのみ』の中で初めて用いられた社号であるが、これからは定雅の在所について得られる情報がない。そこでこれ以前、即ち美角の生前について、他の資料を探ってみる。

まず、定雅ら兄弟との交流も深い、蕪村門凡董の日記『戊戌之句帖』。安永七年（一七七八）二月二三日の条には、次の如く記される（句読点及び傍線は私に付した）。

廿三日

定雅のぬし、去年の秋かせ身にしめる頃ひより、おもきいたつきになやみふし、露の身の置所さへいとおほかなくも見え侍しか、からうして生のひ、あら玉の春を迎へつ。松竹の千代の一ふし諷ひもて起たつほと、きさらき末つかたにはなりぬ。ある日かの白梅楼をたつねて
いさ花に命拾ひし友訪はん

和泉式部の軒端の梅盛りなりと人のいへりしかは、やかて見にまかりしか、先定雅か白梅楼によりて物打かたるほと思はず時をうつしつ。いつしか日もくれ誓願寺のそや撞ほと驚ま山崎の梅屋敷を築き、梅を植へて、頃てなりぬればず
いたつらに梅の邊りへも往すて、帰さ三条の辻を過るとて

暗き道をはるかにほへ夜の梅

傍線部のように定雅の住まいは「白梅楼」と呼ばれている。誓願寺は京都市中京区新京極三条下ル桜之町東側。『角川日本地名大辞典』によれば、明治二年に境内地の八割が上知され、塔頭も一五院が移転・廃絶したという。往時の姿は安永九年刊『都名所図会』⁷（巻一）によって伝えられる。「和泉式部の軒端の梅」もまた『都名所図会』（同）に描かれている。その解説には「誠心院ハ西光寺の北に隣る。（俗に和泉式部といふ。古は小川一条の北にあり。御堂関白道長公の草創にして和泉式部も此寺に入て尼となりて住し也。）本尊ハ阿弥陀佛脇壇には関白道長公の影を安置す。和泉式部塔、軒端梅有。」とある。つまり「和泉式部の軒端の梅」とは誠心院（中京区新京極六角下ル中筋町東側）にある梅のことで、『都名所図会』の図には「泉式部塔」の隣に描かれる。『俳諧類船集』。「名木」の項には「軒はの梅は和泉式部のうへしと也。」とあり、和泉式部との関連の真偽は別としても、よく知られた木である。この梅を題として詠んだ美角の句が、安永六年序、江涯編『仮日記』に収められている。「和泉式部の梅、さかりなれば／幽霊の気しきは見え梅の花 美角」。美角にとっても「和泉式部の軒端の梅」は身近なものであった。

さらに、数年遡り、安永三年十月のこと、暁台が上洛、美角邸に滞在した。その時のことを記した『ゑぼし桶』¹⁰の美角序文には次のようにある。

淑人のすなる日記といふもの、我もすなりと借月楼中に筆さしぬ
らせしは、暮雨宗匠をとゞめし十日たらずのあらまし也。（略）

安永甲午の冬 美角識

また後年文政七年に刊行されたものではあるが、定雅編『反故瓢

二篇』¹¹には安永八年四月、上洛した暁台を囲み、美角の家で連句を編んだ折のことが記されている。

附録 安永八亥年於倍月菴興行

歌仙 前書略す

みやこ人とたちまははりぬ更衣

暁臺

ありやなしやの花探る夏

定雅

かんこ鳥まちもまうけぬ初音して

樗良

浅黄の雲の空しつかなり

美角

(略)

これらによれば、美角宅は倍月楼（倍月菴）と呼ばれているようだ。この倍月楼には、定雅とともに暮らしていたのではなからうか。天明七年刊の『椿花文集』¹²は、定雅の俳諧句文集である。そのなかの俳文「病中口號」は定雅が自身の長引く体調不良について書いたもので、その内容からおそらくは先述の几童の日記に記された安永六年秋頃のことを記したものである。

かなしい哉、予か病事、更に枕を傾けて打ふすにはあらねと、た、起ふしの心重く空しき年月をおくりし事、およそ五とせを過、六とせを経るといへとも、唯に此苦をのかる、事あたはず。よし野初瀬の花のあしたもいたつらになし、須戸の明石の月の夕も化に籠りて旅行風雲のあはれをもしらす。又朝暮産業の勤めもなほさりにして母兄のなげき、衆人の譏しのふにたへす。(略) つねに身をうらみ世をいとふは病身のならひにして、つらさいのちをにくむといへとも、母兄の為にあへて死せん事をもねかはす。た、是天の命にまかさなとたはふれにもいひとよみしか、さるを此

秋の頃は重くなやみて露の身のいとおほつかなくおもほへけるほとに、このかみ、たらちめ、我にそふる人／＼ひそかに枕のもとにまねきて、此世のほたし思ひ残す事とも念頃に云かわしつ、今はおもひおける事もなくて、聊心もはれやかに有けり。(後略)

明確に書かれているわけではないが、定雅は母、兄とともに暮らしていたような印象を受けるのである。そこに父という語が見えないのは、いかなる理由か。定雅の菩提寺は、天明の大火に罹災し、それ以前の過去帳は烏有に帰しているのだが、定雅家の墓碑の裏面には「栖安永第二正月十日」とある¹³。今、詳細は省くが、この墓碑は表に刻まれた戒名などから、父の歿時に建てられたもの。すなわち、定雅の父は安永二年一月に歿したと知れるのである。『椿花文集』にはその時詠まれた定雅の発句が収められており、そこには「父の身まかりたまひし時／＼涙なからはつすや居間の注連筋」とある。春の部にあるこの句より、父親が歿したのは年明けすぐのこととなるが、それは墓に書かれた日付けとも矛盾しない。とすれば、「病中口號」が書かれた安永六年頃には既に父はいなかったのである。さて、病状が悪化する以前についてもやはり美角と定雅はともに暮らしていたようで、たとえば安永五年七月六日には、几童が定雅を訪ねるのだが、その時のことについて次のように書かれている。

「六日も常の夜には似ず」と口ずさみつ、美角・定雅の二子を訪へば

六日たつ秋のこ、ろやほし祭

美角

うすき影踏む月の宵過

几童

車押広野、薄かき分て

定雅

(略)

〔続明鳥〕¹⁴

これを読む限り、二人は同じ場所に暮らしていたように思われる。『はなこのみ』には「在伏水弟 志斉」なる人物の句が収められており、そこには「亡兄世にいます時はともに南枝の梅を愛し、今更此春の梅の一木に感し、消やすき雪の朝こそほいなければと拙き一句を儲けなして一周の手向とす／梅をなかめ雪になみたや去年の春」とある。とすれば、定雅のほかに伏水に住んでいる弟が居るということになる。先述のように美角定雅の二人が俳諧活動をともに

行っていたことは、当時の俳書に二人が揃って掲載されている様子からも窺われるところで、また『はなこのみ』の跋文に几董は「美角・定雅の兄弟は志高山流水のごとく俳諧に遊ぶ事他なし」と書き、二人の仲を伯牙・鍾子期の関係になぞらえている。ところが、二人が出句する俳書に「志斉」という名は管見に見えない。また、定雅の墓碑に、兄や母、三人の女性の名は見られるが、ほかに男の名はない。さすればこの弟は、美角や定雅とは居室を別にしており、二人と比べれば、俳諧活動に執心していたわけではなかった、もしくは離れて暮らしていたために美角らと活動をともにすることがなかったと考えられる。

ところで、ここで気になるのは梅のくだりである。南枝の梅とは『和漢朗詠集』「早春」慶滋保胤「東岸西岸之柳 遅速不同 南枝北枝之梅 開落已異」によったか。何らかの表現に拠ったものだとしても、梅は想像上のものでなく、実際に美角宅に植えられていたのだろう。『はなこのみ』には、美角追悼句が二十句あるのだが（定雅詠句二句、志斉句二句を含む）、このうち、九句が梅を詠んだ句である。その中には几董跋文に添えられた追悼句もある。さらに、本書に収められた追善連句一卷でも定雅がやはり梅を詠み、発句としてゐる。また柳下社友として連句も巻いた柳女は鶯の句を詠んだが、これも梅を想起させるには十分であろう。なお、「花」を詠ん

だ句も二句あるが、「桜」と表す句はない。ともあれ、ここに梅の句および鶯の句を並べるのでご覧頂きたい（アラビア数字は、私に付した『はなこのみ』入集句の通し番号。傍線も田邊による）。

美角居士一周忌

3 魂帰れ祭り初けん梅のかげ

闌更

友の一周忌になりければ思ひ出て

6 香にめて、まほろしに立や闇の梅

方信

7 梅を見に出てうき名を聞日かな

丁東

花鳥の友を失ひて一周忌の春

9 連立し事もむかしや梅の花

季柳

10 うくびすを聞につけても念佛哉

柳女

11 梅柳去年にかはらぬうらみかな

里童

梅柳を角かゝるに手向て

12 せかる、や無為に住日の梅柳

僧 白圭

亡兄世にいます時はともに南枝の梅を

愛し今更此春の梅の一木に感し

消やすき雪の朝こそほいなければと拙き

一句を儲けなして一周の手向とす

20 梅をなかめ雪になみたや去年の春

全

一周忌歌仙

柳下社友

21 腮に手を当し佛梅に恋し

定雅

けふをむかしの春の朝月

志斉

23 薄霞二十五絃の音たえて

古春

24 ひとり残りし卓下の跡

柳女

25 高扉の破れて見ゆる荒島

季柳

26 孕みからすのぬれて啼雨
たのみつる師をうしなひし角力取

里童
嵐川

(略)

美角・定雅の兄弟は志高山流水のこくと俳諧に遊ぶ事他なし。しかるに去年の春このかみはうせぬ。しちに知音のひとりをうしなへるとひんなし。さてしも、のこれる身のならひなれば、定雅暮年のとふらひすとてちかくは同志の句を乞、遠くは諸家の句を拾ひ一冊を編て靈意をなくさむ。我も其需に應して、句を手向るに聊ことは添侍る

91 梅の句にてにはの足らぬ思ひ哉

几童

これ程多く梅が詠まれているのは偶然のことではなく、美角に梅のイメージがあつたからと捉えるべきであろう。そして梅のとりあわせとして柳が詠まれた、また「柳下社」といった社号が出てきたとも考えられる。「柳下社」は美角生前より用いられたものなのか、美角の死を機に定雅が言い出したものなのかはわからない。『はなこのみ』のほかで、美角や定雅について柳下舎と表現されたものは未だ見ない。とにかく、美角邸には梅が植えられており、それは皆の知るところで、美角の知人にとっては彼を追悼するのに梅を詠むのが自然であつたと考えてよいだろう。

さて、『はなこのみ』が編まれたのは、天明元年であつた。それより前の安永七年には定雅宅が「白梅楼」と呼ばれていたことは先述の通りである。「白梅楼」について、定雅自身が認めた俳文が残っている。

白梅楼の記

そのかみ、此ほとりは戒光寺の旧跡にして、松柏枝をならへ、千

草ふかくしけりて、人家まれなりと聞傳へしか、今は萬屋いらかをつらね、せちに産業を事とす。かゝる市中に小扉をまうけて、壁ぬりそへ、簀つゝくりしより、古畳をならへてふしと、はなしぬ。かたへなる炭櫃によりては、粥を焚、しふ茶をわかつて、漸く朝暮の飢をしのく机一きやく、焼鍋二つ、琴一面、茶碗三つ、古き書笈、其外夜のものより外、たくはふへくもあらねは、いと安く世を送りて、聊、山林の閑居にも似たり。又せはき庭の面のかきほはやれて、犬の通路となり、堀くつれてはわらはべや踏あけつらんと見へて、たれつくるふものもあらねは、おのつから苔ふかく、露きゆる時なく、つた朝貞は軒にまとひ、小笹かくれに音を啼むしのさまく、さすかにむかししのはれて、いと哀深し。さあればとて、ひたふるにかゝるあはれをもとめたるにもあらず。たゝ箒とる事のむつかしくて、捨おきたればなるへし。其中に、子か好める花なれば、やせたる梅の一本をうゑたり。まことに竹を愛せし王子猷か徒にはあらねと、ある時は茶に興し、或ときは酒に興して、朝暮徒然の友とはなしぬ。されは白梅の名にしめて、みつから白梅楼とは号し侍りぬ。

梅一木爐にたくほとん落葉かな

(椿花文集)

白梅楼には梅があつた。二人がともに暮らしていたのなら、これが『はなこのみ』に言う「南枝の梅」「梅の一本」か。梅をシンボルトツリーとした定雅の家はこの文によれば「戒光寺の旧跡」の辺りにあつた。戒光寺は、安貞二年(一一二八)、猪熊八条の地に建立されたが、その後応仁の乱で堂舎焼失。本尊は一条戻橋の辺りに移った。その後天正一八年、京極三条に移築された後、正保二年(一六四五)後水尾天皇の発願によつて現在地(東山区泉涌寺山内町)に移り、泉涌寺の塔頭とされた。この度重なる移転によつて、

「戒光寺町」と呼ばれた土地が複数あり、たとえば上京区油小路通元誓寺東入ル町や猪熊通八条上ル一丁目西入が挙げられるが、白梅楼があつたのは凡董日記で触れたように誓願寺や和泉式部の梅の近くであるから、河原町三条、寺町三条の近辺である。やや後年元治元年（一八六四）刊『花洛名勝図会』（巻八）によれば、「戒光寺

泉涌寺塔頭総門の内北方にあり。（略）（當寺其始は猪隈八条にあり。今戒光寺卑といふ。其後小川一條の北に移し又京極の東三条の北に移す。今尚戒光寺辻子といふ。正保年中今の地に移して泉涌寺に属す。）とある。『京都・觀光文化時代MAP』¹⁵「安土桃山地図によれば、三条大路を挟んで誓願寺の向かい、御土居堀の内、栗田口の辺りに戒光寺はある。確かにここならば、定雅の記述とも合致する。このあたりについて、定雅は「今は万屋いらかをつらね、せちに産業を事とす」という。定雅の家はみすや針の商家であつたと言われているのだが¹⁶、三条にはこの時代数件の針屋があつた。

元禄三年刊『人倫訓蒙図彙』¹⁷（巻五）を見ると、「京針師、三条河原町角、福井伊与、富永伊勢、井口大和、五条油小路、其外大津追分、池川、大坂、堺筋にあり」と三条では三軒の針屋が挙げられている。天保二年刊『商人』買物独案内¹⁸には多くの針屋が載るが、三条河原町では、「三条河原町西へ入南かは」の「根元無双本家みすや 御針司」とみなか伊勢大榎、「三條通河原町西へ入北かは」の「京都一家根本みすや／御針司 福井伊豫榎」、の二軒の名が見え、さらに、また近辺の「三条富小路東へ入」の「本家本みすや 富本藤八郎」が載る。ほかにみすや針を扱う店は幾つかあるが、ともあれ、天保まで下つてもなおこの辺りには針屋が並んでいた。定雅によれば、白梅楼は市中に存していたようだが、河原町三条あたりならば合点がいく。

渡辺滋著『日本縫針考』（文松堂出版 一九四四年）には、みす

や針について次のような記述がある（引用に際して、旧字は現行の字体に改めた）。

このみすや号の件に付き、最近、京都三条通寺町東入ル本家みす屋福井まん氏（伊予の子孫）に就いて尋ねた所、大凡左の如き回答を得た。（略）これに依つて見ると、美寿屋の号を賜はつたとあるが、其の美寿屋の名の起りは、別項東京相山氏の家に伝はる説の通り、京都在伏見の近傍に、上三栖下三栖の両村が、元治元年版の京絵図にも、参謀本部の地図にも、見える。これがミスヤの出た処（京都在より以下中村利吉氏の説）であると云ふ。

（第二篇 産地 第二章 京都）

前に記した通り、昔の江戸大伝馬町三丁目、今の東京都日本橋区通旅籠町三番地に、昔から○本みすや相山仙衛門と云ふ、古い針問屋がある。其の家の口碑には、元京都在三栖屋村から、二百七十八九年前に（大正十年より）江戸に出て来た、それは前記みすや庄兵衛、みすや中村利吉の外のミスヤで、三栖屋五郎兵衛と云つた、夫が廃業するので、寛政年間其の株を引受けて、大伝馬町に針店を開いたのが、今の相山氏の先祖である。（略）成る程今京都在には三栖屋村がある。又大阪の針屋に三栖屋新右衛門といふのが有つて、これが相山氏と同家であると云ふ。このミスヤは御簾屋でなくて三栖屋と書く。（同 第四章 東京）

定雅が仮にみすや針を商う商家であつたとすれば、「みすや針」の名称は伏見の「三栖」という地名から来たという説は興味深い。というのも、定雅は伏見と縁があるようだからである。まず先述の『はなこのみ』には「^{在伏見第}志斉」の名があつた。それから、詳細は

別稿を用意するが、定雅の菩提寺である善導寺には墓や法要について記載した寺用の控えである盆欄帖というものが存在するのだが、その中の定雅一族の墓について書かれた箇所には、「伏見京橋大塚小右衛門より勤む」とみえる。この右となりには定雅のことを示していると思われる「東山貞我事／みす屋甚三郎」の名も見え、二人で法要を執り行ったのだらうと思われる。なお、この時美角は既に鬼籍に入っており、「大塚小右衛門」は美角のことではない。一方定雅歿時の過去帳には「東山俳仙堂主西村倍美より勤」とあるのだが、この倍美が伏見京橋に住していた大塚小右衛門だらうと推察できるのである。倍美は、定雅と同じく西村姓を名乗っており、また後述の通り、「定雅の遺弟」と言われる人物なのである。とすれば、志齊、大塚小右衛門、倍美、これらが同一人物という可能性もある。いずれにせよ想像の域を出ないが、定雅弟は伏水（伏見）で暮らしていた。弟のみ伏水に住んでいたというのはそこに定雅の親戚でもいたのかもしれない。

ところで、馬琴の残した住所録（滝沢家訪問往來人名簿）¹⁹には、定雅の名も二度見える。初めは「一 河原町三条下ル二丁目 はいかい師／戯文作者 西定雅殿」。「滝沢家訪問往來人名簿」の記述は享和二年より始まり天保一五年に至るといふ²⁰。二度めの記載時期は、文化八年一二月なので、最初に書かれた住所は、それより前のものである。享和二年七月三日から二四日、八月六日から八日まで、馬琴は京都に宿泊。『鞆旅漫録』²¹には「齋藤文次」という虚談の名人の逸話を書きとめ、そこに「西村定雅話」と記す。とすれば、定雅と馬琴にはこの旅の間に交流があったと考えるべきだらう。事実、後年、馬琴の息子も定雅について「この人も家君と面識にて」（『旅中耳底歴』²²）と述べており、河原町云々の住所は享和二年頃のものかと考えてしまう。しかしながら、後述のように、定雅は天明に

は東山へ移居する。その後、再び、白梅楼があった辺りである河原町三条に越したか、はたまた東山に庵を構えつつも、もとの家の場所は河原町三条から動かなかったのか、それとも馬琴の住所録に書かれたものがそもそも東山へ転居する前の古い住所であったのか。目下のところ、真実に辿りつくべきがないが、河原町三条下ルは誓願寺の裏辺りであるから、白梅楼の場所と考えたいところである。

さて、「白梅楼の記」は天明七年正月に刊行された『椿花文集』に収められているのだが、その跋文には「爰に椿華亭の主人、過ぬる暮春の此四壁の一廬をまうけ」とある。跋文に日付は入っていないが、序文は「天明ひのえうまのとし朔且冬至の日源好古梁山の草堂にしるす」とあり、天明六年冬である。あくる正月には刊行されているので、おそらく跋文にいう「過ぬる暮春の此」とは天明六年三月ごろのことである。してみれば、ここに書かれている「四壁の一廬をまうけ」というのは白梅楼のことではないということになる。白梅楼は、几董の日記にも見られるように、安永七年には既に存していた。さらに定雅は、天明の途中より「椿華（花）亭」という亭号を用いるようになる。そしてその椿花亭は三条にはなかったからである。

二、椿華亭前後

椿華亭について書かれた文がある。『椿亭記』と題した冊子は、「たうておはらはめやすかるへきを、ものうくもことし、よそしのとしかそへぬ／生過て老の名付ぬあたら春 定雅」の句を発句に紫暁、關更の三ツ物を冒頭に据えた、定雅四〇歳記念の集である。その最後に「椿亭記」と題した俳文を載せている。

椿亭記

酒は風流のあるし、茶は風雅の友、されはもろこしの司馬相如は酒をうりて文に遊び、此國の通圓は茶をうりて侘をたのしむ。我此頃双林寺なる西阿弥の園のかたはらによもきの軒を結びて、例のわさくれを弄ふのいとま、彼相如か酒、通圓か茶を霽く。か、る門に邊りする人風流の徒にあらずといふものなし。飲中の仙にあらずといふものなし。いてや伯倫か二日酔には初むかしをもて是をなくさめ、玉川か寐覚かちなるには鬱金香をもてこれを忘らしむ。其角も丈草も此亭に遊びてうむ事なかれ。もとより阿弥のあるし月峯子は所謂数奇人にて家居より庭の木たち、遣り水のさま、菊の谷のなかれをせき入れて、見ところ多クつくりみか、れたれば、春は梅の初花より、枝にかよふ鶯、水になく蛙、柳桜の花みとりは更にもいはす、つ、し・山吹・藤・杜若、咲みたれたる花の中に、圓山のいと竹は長樂寺の霞をもれ、清水寺の鐘の聲は音羽山のあらしにはこふ梢の青葉、若楓、さつきまつ花橘に、ほと、きすの初音待すしも、螢飛かふ夕闇のなかめこよなうおかし。暑き日の夕風はかのなかれにひたして、薄衣の袂にかよふ秋は猶月の夜ころ荻薄に床の音添ていと哀おほかめれ。朝な夕なの虫の聲、谷の紅葉はまはゆきまでに染なし、籬の菊はわきてなところの色香、世にすくれけん。かみな月の頃、時雨の空、霜の夜雪のあしたは何にたとふへき。山は殊更、花頂靈鷲につらなり、西行・頓阿か古き跡、はせを・東花か碑のほとりに、かうやうの柗をもとめ、茶あり、酒あり、俳諧あるの業に世をすこしけむは、浅からぬ風流のえにしならむかし、とある日、窓前の一樹に對し

て更に古しへの春をしのふ
もの言ぬ花にはつかしあるし顔 定雅

定雅の新たな住み家についてヒントとなるのは傍線部だろう。月

峰は双林寺の三四世住職で²⁴、画をよくし、また俳諧も楽しんだ。詠句は定雅の俳書にも度々収められている。その月峰のはからいであったか、定雅は双林寺に居を構えることになった。俳諧旧跡として知られる双林寺は、東山区下河原鷺尾町にあるが、明治初年、名勝地の公園化計画の際に寺域が円山公園に指定され、現在では本堂しか残っていない。『都名所図会』(卷三)で当時の姿を確認すれば、双林寺本堂正面、南方にまっすぐ進んだ区画のうちに「西阿弥」は存する。この後、『花洛名勝図会』(卷三)の双林寺俯瞰図を見ると、本堂南側の同区画に「西阿弥」の字はなく、かわりに、「長喜菴」と書かれている。開設部分には「長喜菴(本堂の南にあり。當寺の住持こゝに居れり。其庭栽は林泉名勝図會に出たれば爰に畧す。近年池辺に紫陽花繁茂して、年々五月の半より数百花咲ほころへる姿甚雅致ありて一壯觀となれり。當庵先住謙阿画名をは月峯といふ。曾て池大雅無名に学んで丹青に妙なり(略)」とあり、長喜菴は双林寺の住持が住むところであった。寛政一一年刊『都林泉名勝図会』(卷二)で「雙林寺長喜菴」の庭の図を見ると、定雅が「菊の谷のながれをせき入れ」といつているように、「菊溪」と書かれた川が庭の中を走っている。なお双林寺には、「西行上人塔」、「頓阿法師塔」、「東華坊支考によつて建てられた「芭蕉翁碑」、表門の内南側には「西行庵」、門前南側に「芭蕉堂」(以上『花洛名勝図会』(同))があり、これらも椿亭記の内容と齟齬しない。ともあれ定雅は「双林寺なる西阿弥の園のかたはら」に椿花亭を構えることとなった。『椿花文集』の跋文にある「四壁の一廬」が、白梅楼ではなく、椿花亭を言うのならそれは天明六年三月頃のことである。

さて、『椿亭記』は、不惑を迎えた定雅の記念集であった。定雅の生年については、これまで藤井乙男氏の「文政九年八十三歳にて

歿し」(江戸後期の京阪小説家)に依るしかしかなかった。定雅の墓碑や過去帳などにも享年を示す記載がなく、また管見にして定雅の享年に繋がる他の資料にも行きあたらない。文政九年に八三歳で歿したのなら、逆算して延享元年生まれ。これまでの辞典類には、そう記載されてきた。さらに延享元年生まれなら、不惑を迎えたのは天明三年、『椿亭記』も同年の作と考えられてきた。ところが、そうすると『椿花文集』の記述と合わないのである。『椿花文集』跋文に書かれた「四壁の一廬」が椿亭を指すのならば、椿亭(椿花亭)が出来たのは天明六年三月ということになるのだ。なお、楳行編『半日行脚』の定雅跋文には「…もとより半日の遊行をもて半日行脚と題せしも、すべて名をかさらぬこゝろさしを見るにたれりと春古亭定雅筆していふ。天明四辰春」とある。すなわち天明四年春には「春古亭定雅」と名乗っていた。

安永から天明初年頃に住していたのは三条河原町辺りの「白梅楼」。同四年頃には「春古亭定雅」と自称する。そして四十を迎えて東山に移り、双林寺の近くに椿亭を構えた。『椿花文集』の跋文によれば椿亭とは「過ぬる暮春の此」、即ち天明六年春に設けられた「四壁の一廬」をいう。仮に天明三年に椿花亭へ越していたのなら、天明四年に「春古亭」と言う必要はなかっただろうし、『椿花文集』跋文の説明がつかない。「春古亭」が白梅楼に居た頃に使ったものなのかどうかは今のところ不明であるが、椿花亭に移ったのは天明六年とすべきだろう。また春の句のみで構成され「椿亭記」を最後に据える『椿亭記』が編まれたのもやはり天明六年暮春のこと、そしてその年に四〇を迎えたと考えるのが自然である。となる、定雅の生まれた年は延享四年(一七四七)年となるのである。

三、俳諧学校俳仙堂設立

椿花亭が天明六年の春に落成したとして、それ以降はどうなったのだろうか。同七年正月刊行『椿花文集』序文には「されば、椿花亭定雅としごろ俳諧に心をゆだね、文章においても独見る所ありて、自一家をなす。」、跋文には「爰に椿華亭の主人過ぬる暮春の比：」とあるように、当たり前のことではあるが、「椿花亭」の語が頻出するようになった。天明八年一月三〇日、天明の大火。御所や二条城、東西の本願寺を含む京都市街がほぼ灰燼に帰した史上最悪の火事であったが、双林寺辺りは延焼を免れたから、椿華亭も無事であったことだろう。翌年一月二五日には、寛政に改元。四月一三日、几董が来訪するが、この時の日記には「十三日 快晴 桃睡同行東山遊行定雅闌更訪」(『寛政己酉句録』²⁵)とある。闌更もまた双林寺に南無庵を営んでいたので、定雅と闌更を同じ時に訪ねるといふのは合理的である。三年には『さくら智』を刊行。自序に「寛政三のとし 亥のみな月 椿花亭定雅」とある。椿花(華)亭の例は枚挙にいとまがないが、続けて幾つかを挙げてみよう。五年七月二〇日、雲帯宛紫暁書簡²⁶には「一 椿花 同(田邊註…短冊一枚)椿花ハ定雅の別号也」とある。どうやらまだ定雅の方が通りがよかったようであるが、椿花の号も少しずつ認知されていたようである。十年には維然の追善俳諧法要が双林寺で執り行われた(定雅著『維然法師追善風羅念仏』に寄せられた土卵跋文には、「既白ありて此風羅念佛を傳へたり。終焉の時にいたりて椿花のぬしにかの念仏の始末をねもころに傳へ、猶維然師か手跡のたんさくをあたふ。ことし此日百廻りの日にあたれりとて、例の社友をかたらひ、東山雙林寺において俳諧の法筵をひらき風羅念佛の追善をいとむ(略)」。文化に入っても、椿花亭の号を使用していた。文化二年『幾野笠』の自

序には「椿亭定雅」と記される。

さて、翌年三年定雅自序『そのとなり』²⁷は興味深い。本文一丁より引用する。

椿亭定雅述

ひかし山十六峯のみねく、いつれ花なきはあらし。中にもこのいた、きのみ花の名を蒙りたれば、わきて花の最中といふなるへし。されは此邊に菴をまうけてその花をまつ春をむかへ侍る

元日の明行空や華頂山

かく我軒の街は華頂山の禁よりして連わたれば、襜に知恩院町と号く。さするに山家のおもかけありて、洛中のかしましきには似す。豆腐うる家、酒つくる肆も少し隔り。且暮のすぎはひ只靜にして、我ごとき孤獨の貧士か世渡るにはむへなり。軒かさり門松立ぬ柴の扉、ゆがみてもすちりても誰とかむるものなく、例の朝寐にたれこめて春の行衛もしらて過ぬ

物申の相手になるや夜着の内

華頂山のふもとで、「知恩院町」と言われる辺りに「菴をまうけ」とある。ここに言う「菴」は今まで住んでいた双林寺辺りの庵「椿花亭」とは異なるのだろうか。同年の序文を持つ盧橘庵著『郭中掃除』²⁸に定雅と思しき人物が登場することは既に藤井氏により指摘されるところであるが（「江戸後期の京阪小説家」、本文には定雅の家に関する記述もあるので、ここに引用する（説点は田邊による）。

いつくともしらずうすどろく、のすごきあいかたにて、坊主天窓に青黛ぬり、菩薩出の足に紺足袋はき、死んだ五雲が涎沫垂ぬ様な宗匠らしき懐親仁、忽然と顕れ出、我を誰とか思ふ、斯いふは

粹雅靈神とて我と我手に酔と云字を名に附くらゐの酔じやもの、酔でなふてなんとしやう其酔雅がいふことをよく聞べし、我もいにしへは終日終夜色里へ入込、親兄弟の異見を用ひず、通ひ尽せしかいあつて、自然と里の諸わけを覚へ、揚屋も茶屋も出てこぬ客をくり出す内證をたのみ里へ入込ほどの嬢は娼婦声妓のこなしを差図うけたがり、物やらぬ幫間までが附したがひ、みすくはくとしつた娼婦もエふらぬ程にしこなし、親の譲りの金銀を落花微塵に遣ちらせし故、金花亭と遊名を呼ばれ、居宅の角屋敷をうりこぼつて、天窓は丸ふ剃こぼち、今は此世に無き、かげの酔雅明神とあがめられ、色里近くに跡をたれ、酔の帳合をしていること、地府の修文郎にひとし、（『郭中掃除』巻三）

「金花亭」は椿花亭を匂寄せたもの。「親譲りの金銀」とあるから、やはり定雅は裕福な家の出であったのだろう。家産を蕩尽した末、三条河原町辺りにあった「居宅の角屋敷をうりこぼつて」しまふ破目になったという。また定雅は寛政四年に剃髪しているので、坊主天窓云々というのも事実上添う。なお、その姿は寛政八年刊『俳諧百家仙』²⁹に見ることが出来る。「酔雅明神」は、洒落本作家としての号「酔川子（士）」と「定雅」を足したものだ。こうしてみると、ここには概ね正確に当時の定雅の姿が描かれていると言える。文化三年頃、定雅は「色里近くに跡をたれ」ていた。明治五年写『京都府下遊廓由緒』³⁰によれば双林寺のある鷺尾町には遊女屋があったという。しかし他に、近くの上弁天町・月見町・下河原町もまた祇園周辺の遊里として大いに栄えたようだ。『そのとなり』で知恩院町と書かれていることからすれば、双林寺の辺りから移ったと考えべきか。

さて、ここに次のような一文を冒頭に据えた定雅の俳書がある。

北野に連哥堂あり、白河に詩儂堂あるにもつき、東山にして俳仙堂といへるを一字いとなみ、長くこゝに俳諧学校にもなしてんの望しきりなれば、頓て社中のたれかれをかたらひまうけて、や、ことしこゝにかゝる一草堂を築き、且其かたはらなる花の木かけを我終の臥所ともなして今やとし月のこゝろさしをはたし侍りぬ。

俳仙堂

定雅

花鳥やこの花守を老か果

これは刊年不明の年刊句集『春懐紙』であるが³¹これによって、定雅が「俳仙堂」と名付けた「俳諧学校」を設立したことを知るのである。この句集の中で、定雅は「定雅」「椿花」両方の号を用いている。また「椿亭におゐて興行」として椿花・文鳳の連句が収められている。天明六年春に構えた椿花亭（椿亭）と俳仙堂が同一のものなのか、ここからは判然としない。続けて他の資料にあたってみよう。

文化八年には、定雅と馬琴との間に書簡のやりとりがあったようである。前述の馬琴名簿二度目の掲載では「未十二月文議／一京都東山孔雀茶や向 俳仙堂 西定雅」と書かれている。即ち、この時までには、「俳仙堂」が出来上がっていたのである。そして翌九年の定雅年刊句集『春懐紙』冒頭には、「俳仙堂の葛の戸をひらきて 俳仙堂定雅／我春や菌朶も齋も庭の艸」、また同年秋刊、白雄著『俳諧寂菜』に寄せた定雅序文にもまた「平安ひがし山俳仙堂の窓下にいさゝか微意をかひ添る事しかり 文化九年申のあき 定雅（花押）」とある。こうしたことから、俳仙堂の設立は文化八年以前

とわかる。さて、先に挙げた刊年不明『春懐紙』に載せられた文と近似する文が、文政五年刊『文集反故瓢』に収められている。以下は、その文章の冒頭部分である。

俳仙堂の記

北山に詩仙堂あり、北野に連哥堂あり。尚哥仙堂は朶山の麓に何某のと、め玉ひけるか、こはいつの頃にかあとなくなりて、今は其名のみ残れる。さるをこの頃、季鷹うし、加茂の御社近きあたりにその跡をつき再び造立し玉ひければ、詩哥連の三つの堂はおこそかにそなはり、いつれ都の名所とはなりぬ。さは我もこれにもつき東山にして俳仙堂を一字いとなまん事を思ひおこしければ、草阜、文鳳、路周、ともに力をそへ、尚誰かれ同志の風士を引て終に年月の願ひをはたしぬ。

（文政五年刊『文集反故瓢』³²）

前掲の文より、詳しく長くなり、先の文になかった「歌仙堂」の話が加わる。盛田帝子氏によれば、季鷹が歌仙堂の修繕を始めたのは享和元年のこと、そして文化八年三月十八日には完成の祝賀会を催したという。『文集反故瓢』は文政五年、歌仙堂が完成した後の刊行である。先の『春懐紙』文章に歌仙堂云々がなかったのは、『春懐紙』が書かれた時にはまだ歌仙堂がなかったからなのか、修繕の途中だったからか、既に出来てはいたが定雅が知らなかった、知っていたが書かなかったのか、そのいずれかはわからない。『春懐紙』が書かれた時点が歌仙堂完成前なら俳仙堂設立は文化八年三月十八日より前のこと、歌仙堂完成後だとすれば、俳仙堂は文化八年三月以降に設立されたことになる。だが、文化九年刊の年刊句集は『春懐紙』として存在する。よって、刊年不明の年刊句集『春懐

紙』は文化八年以前のものとなり、俳仙堂設立もまた文化八年春以前のこととなるのである。

それでは俳仙堂はいったどこに設立されたのだろうか。文化十年の成立と思われる定雅の年刊句集『真葛草紙』³³には「感神院の華表のほとりなる艸庵において此集をつゝりたれば、真葛双紙とは号はへる」と記される。「感神院」とは、『都名所図会』(巻三)に「祇園社下河原を南面とし鳥居は石柱にして感神院といふ堅額あり。」とあるように、祇園社(現八坂神社)のこと。鳥居は『花洛名勝図会』(巻二)に「鳥居 南向石柱」とあり、今と同じく敷地の南面にあった。『都名所図会』や『都林泉名勝図会』(巻二)などの画に、当時の姿を見ることが出来る。

そして同じく『都名所図会』(巻三)に従えば、『真葛草紙』の題となった「真葛原」とは、「真葛原は祇園林のひがし、知恩院の南をいふ」、『拾遺』都名所図会』(巻二)には「知恩院山門のまへより南、圓山長楽寺のほとり、祇園林までをいふならん」、『花洛名勝図会』(巻三)では更に限定され「祇園林より、ひかしは円山門前に至り、北は知恩院山門の辺より、南は東大谷の辺までをいふ。」とあり、祇園大鳥居前の道から真葛原一帯の図が載る。俳仙堂はこの辺りに置かれた。定雅の歿する四年前、文政五年板『平安人物志』に「西村定雅 号椿花亭／真葛原俳仙堂 西村椿華」とあるので、この後その生涯を終えるまで真葛原に住み続けていたのだろう。

先に挙げた馬琴の名簿には、「京都東山孔雀茶や向 俳仙堂 西定雅」とあった。『花洛名勝図会』(巻二)の下河原の項に「下河原(祇園大鳥居の正面條をいふ。風流の茶店、楊弓屋、高樓の貨食家建つらなり。哥舞の妓婦花やかに往返し、醉客街に漂ひて最賑はし)(中略)いつの程にか山崩れて川を埋み、今の如く高樓飛観軒をつらねて哥舞の街なれり。此辺瀧本、或は南北のさのや孔雀楼

など称する宴席多し。今は廃して梅の尾瀧本など頗る盛ん也。」という。馬琴の言う「孔雀茶屋」はこの「孔雀楼」のことであろう、どうやら下河原の辺りに存在してらしい。下河原は祇園社の鳥居の正面の道というから、文化十年『真葛草紙』の「感神院の華表のほとり」という言葉とも矛盾しない。『都名所図会』(巻三)には、下河原辺りの図があり、そこには『花洛名勝図会』に出る「楊弓場」や「瀧本」のほか、「かはづか池」「きく水」「牛王」³⁴などが見える。図の前の丁にある解説によれば、蛙が池は下河原の西、菊水は下河原の東方、牛王地社は下河原の南にあるという。また、『京都府下遊廓由緒』によれば、鳥居から南下する道は「俗称下河原」、その道から東へ入る道、即ち双林寺・高台寺へ向かう道を「双林寺道」、「下河原」より東「双林寺道」より南の区域を「下河原町」としている。どれにもあいにく孔雀茶屋は描かれていないが、この近辺であったことに間違いはない。

ところで、馬琴の息子琴嶺が文化一二年、一八歳で上洛した時のことを書きとめた『旅中耳底歴』の六月二三日の条には次のように書かれている。

○日野屋八郎兵衛を訪ふ。別を告んとて也。角鹿同道にて、東山なる土卵子を訪ひしに、宿所に在らず。故にそか向なる、西定雅を訪ひぬ。この人も家君と面識にて、俳諧の宗匠也。この家に芭蕉の肖像あり。○雙林寺前に芭蕉堂あり。些し上に、大雅堂の碑、大雅の母の墓あり。又その上のかたに西行菴あり。西行桜といふ古木あり。塚は雙林寺にあり。

土卵に会いに行ったが留守なので、その向かいに住んでいる定雅に会いに行ったというのである。では、土卵はどこに住んでいたのか、

四日前、六月一九日の条には、以下の通りである。

夕つかたより心地清やかに覚しかは、土卵子を訪ふて對面。清談數刻にして宿にかへりぬ。この人の家は、真葛の原雙林寺前にあり。実名富左近將監、土卵は俳名也。俳諧を嗜めり。家君と十四年来の友也。

土卵もやはり真葛原に住していた。なお、馬琴の住所録には、定雅が最初に掲載されていた半丁前に、「一 東山雙林寺門前下河原北面隠居 土卵ト号ス 東美左近將監殿」と書かれており、この住所ならば息子が書きとめた雙林寺前という場所を指すだろうから、土卵はこの間同じ場所に住んでいたということになる。雙林寺の門は『都名所図会』（卷三）や『花洛名勝図会』（卷三）の画にも見られるように、東に位置する。なお裏門は『花洛名勝図会』東山大谷御廟所の図（卷三）に描かれており、東大谷寺の唐門を下ったすぐ側である。「雙林寺門前」という語に注意すると、例えば『都名所図会』（卷三）には、「祇園女御の旧跡は雙林寺門前の北にあり（東西八間南北五間）此地を耕せんとすれば崇有とぞ」とある。祇園女御旧跡³⁵は、『拾遺』都名勝図会』の雙林寺周辺を描いた図（卷二）に描かれており、それによれば、雙林寺の敷地内に入る階段の元右側（南側）に蘭更の舎である「南無庵」、その横に「芭蕉堂」、雙林寺の階段を挟んで左手には「大雅堂」、寺の前の道を渡った左側、すなわち寺から見れば北西の位置に「祇園女御」がある。さらに北に進めば、山の方に曲がる道があり、東大谷へと続く。祇園女御旧跡は『花洛名勝図会』の東大谷門前松林參詣道の図（卷三）でも同じ位置に描かれている。こうしたことから、雙林寺の門前と呼ばれる場所は、東大谷參道より南側、高台寺の方向に向かう道とわかる。同じ道に

面した大雅堂についても『拾遺』都名所図会』（卷二）では、「歌仙堂（又の名は大雅堂といふ。雙林寺境内門前の北にあり。別室に觀世音を安置す。金銅佛長は五寸五分計也）」、『花洛名勝図会』（卷三）でも「雙林寺門前の北側にあり」とあるので、雙林寺門前という場所はこの辺りを指すと知れる。

俳仙堂については定雅歿後に書かれた文章もある。安政六年序、暁鐘成著『晴翁慢筆』によれば「俳仙堂は洛東下河原の東に有しが。終に廢して」しまったという。

いよいよ煩雑になってきたので、これまでに得た俳仙堂の場所に関する情報を時間順に整理してみよう。

「文化三年頃」知恩院丁辺りに住む。「色里近く」。

「文化八年春、もしくはそれ以前」東山に「俳仙堂」設立。

「文化八年二月」「京都東山孔雀茶や向 俳仙堂 西定雅」。孔雀茶屋は下河原にあつたらしい。

「文化一〇年」「感神院の華表のほとりなる艸庵」。つまり俳仙堂の場所は祇園社の南の大鳥居の辺り。

「文化一二年六月」土卵の向かいに住んでいる。土卵は「真葛の原雙林寺前」。馬琴住所録には「雙林寺門前下河原」。

「文政五年」「真葛原俳仙堂」。

「安政六年以前」俳仙堂廢す。それ以前は「洛東下河原の東」にあつた。

これらから導かれるのは、土卵は雙林寺門前、つまり祇園女御の旧跡や大雅堂のある通り、「下河原」なのでその西側で暮らしていた、そしてその向かいに住んでいたという定雅は、祇園社の鳥居から南に伸びる下河原通りの東側に「俳仙堂」を構えていたという結論である。俳仙堂は文化八年頃に設立され、そこが定雅の終の住み処となった。ところで土卵の住所にも定雅の住所にも「真葛が原」（真

葛の原)と見える。真葛が原は先にも見たように知恩院(北)、祇園社(西)、円山安養寺(東)、東大谷(南)で囲まれたあたりを指すようであるが、ここで至った二人の居宅の場所を考え合わせるに、彼らは『花洛名勝図会』に定義された真葛が原の内に住んでいたわけではなさそうである。「真葛が原」とは、さらに広範を指すのか、いわゆる真葛が原の近くという程度の意味合いで象徴的に用いられた語なのかははっきりしない。なお、双林寺の門前の土地、つまり祇園女御旧跡の周辺であるが、この辺りの画を『拾遺』都名所図会や『花洛名勝図会』で見ると、草が茂っていたり、耕している農民が描かれていたりする。そもそも祇園女御の旧跡は「今に此地を耕さんとすれば必崇ありて恐れをなす。此地女御薨後、寺となして蓮華院と号せしか其寺も廢絶したり。しかとも一灵有て地主と成しにや昔より此地を領するものなし。地を動くをはかならず崇りあるなりとぞ。」(『花洛名勝図会』卷三)とあるように、気味の悪い言い伝えがあるから、古跡の近くに人が住みながらないのも無理はない。祇園林や下河原の喧騒と比べれば、双林寺門前は幾分静かな土地であっただろう。東大谷からそう離れていないこの辺りまで真葛が原という認識ももしかしたらあったのかもしれない。ともあれ、土卵の住居、俳仙堂の場所はかなり狭い一角にまで絞られた。

ところで、俳仙堂は下河原の東であるなら、双林寺西阿弥のかたわらであったという椿花亭から移ったと考えるべきだろう。『そのとなり』では「知恩院丁」と書かれているので、あるいは双林寺から下河原に移る間、知恩院の辺りに住んでいたとも考えられる。ただし、俳仙堂設立以後もたとえば『平安人物志』に「西村椿華」や文政年間刊行の『真葛』春懷紙³⁶ 歳旦三ツ物に「椿定雅」とあるように、「椿花」は号として残した。

おわりに―その後の俳仙堂

定雅が「俳諧学校にもなしてんの望しきりなれば」(刊年不明『春懷紙』)と述べているように、俳諧を指導する場として建てられた俳仙堂はその後どうなったのだろうか。文政四年刊『俳諧雪とすみ』³⁷の中で、月居は序文に「されはかくれ蓑かくれ笠の着やうをよく習て、師かことくまことの寶をぬすめよや、俳仙堂下のわかうと達」という。また文化文政に出された定雅の年刊句集にも多くの俳人の名が並んでいることからして、俳仙堂はそれなりに賑わっていたのだろう。定雅自身も『平安人物志』にも載せられ、最晩年にあつてもその俳諧師としての勢いは衰えることがなかった。

定雅が文政九年に歿した後、俳仙堂はどうなったのだろうか。『晴翁慢筆』にその後の俳仙堂の様子が窺われる。

初代俳仙堂定雅。此一軸を秘藏し。例年の芭蕉忌に是をかけ。門人等を集会して追薦を催せり。爾後門弟朝陽俳仙堂を相續し。此一軸を譲り受て藏す。然るに故あつて朝陽ハ芭蕉堂蒼虬の跡を嗣ぎて自分の門人蔦雨にこれを譲る。又蔦雨故郷の坂本に帰る時。定雅の遺弟倍美に譲り戻せり。倍美後に同門鸞山に譲る。故に今の俳仙堂鸞山これを所藏す。俳仙堂ハ洛東下河原の東に有しが。終に廢して遺物俳仙堂の額(加茂甲斐守筆)水月の文台。翁の木像等をも当時鸞山の家に秘藏せり。(鸞山子ハ倍美の甥にして翠松園とも号す) (『晴翁漫筆』)

これは俳仙堂に伝わる芭蕉の涅槃像の行方について書かれたものである。その画は文政六年一〇月に岸駒に描かせたものだという(同書)。なお、馬琴の息子琴嶺が「この家に芭蕉の肖像あり。」といっ

ていたものは、時期からしてこれではなく、「俳仙堂の記」にある「翁の木造」のことだろう。

さて、『晴翁漫筆』によれば、まず、定雅歿後、定雅の門人のうちから、朝陽が俳仙堂を継ぎ、最終的には定雅の弟の甥が俳仙堂を名乗ったことになる。鸞山が倍美の甥ならば、定雅や美角の子とも考えられるが、定雅の子ならばそう書いただろうから違うのであろう。俳仙堂歴代については、少しく考証が必要であるので、別稿を用意したい。ともあれ、『晴翁漫筆』は安政六年序であるから、定雅が死して後およそ三〇年で、定雅が築いた下河原の俳諧学校は無くなってしまっていたのである。

註

- 1 藤井乙男「西村定雅」『江戸後期の京阪小説家』(『江戸文学研究』内外出版 一九二一年)、中村俊定「定雅」(『続俳句講座(俳人評伝篇)』改造社 一九三四年)、高木蒼梧「定雅」(『俳諧人名辞典』明治書院 一九六〇年)。
- 2 「女子大国文」第七二号(昭和四九年一月)掲載。『近世中期小説の研究』(桜楓社 一九七五年)に再録。
- 3 『はなこのみ』については、拙稿「美角追善『はなこのみ』について」(『湘北紀要』三二号 二〇一〇)を参照されたい。
- 4 兄が没するまでの二人の活動については「安永期における美角・定雅の俳諧活動―西村定雅年譜攷(一)―」(『語文研究』一〇六号 二〇〇八年十二月)にまとめている。
- 5 引用にあたり天理大学附属図書館・綿屋文庫本を参照した。なお、全文翻刻は註3に示した拙稿に掲載している。句読点は私に付した。引用は『几董句稿』上(天理図書館善本叢書五一 八木書店 一九七九年)による。
- 7 本稿では『都名所図会』『拾遺』都名所図会』『都林泉名勝図会』『花

洛名勝図会』を用いるが、いずれも国際日本文化研究センターのデータベースによった。なお、引用文の()内は割書きである。

近世文藝叢刊第一巻『俳諧類船集』(般庵野間光辰先生華甲記念会 一九七一年)。

『天明俳諧集』(新日本古典文学大系七三 岩波書店 一九九八年)収載の翻刻によった。

同右。

引用は柿衛文庫所蔵本(は・二一七・六六二)による。

『椿花文集』は、天理大学附属天理図書館本(わ・一七六・四六・二)を参照した。

定雅の菩提寺である善導寺に伝わる資料や墓碑については、同寺御住職の御教示による。

『統明烏』は安永五年刊。『天明俳諧集』(註9)に載録。

『京都・観光文化時代MAP』(光村推古書院 二〇〇六年刊)。安土桃山時代地図は、花園大学教授山田邦和氏制作『戦国期京都市街地復元図』を基本図とし、御土居堀と寺町は佛教大学非常勤講師中村武生氏の研究成果を使用している。

家業については、冒頭に掲げた水落氏の文に書かれるのみで、それを裏付ける資料は未だ発見されていない。

京都大学電子図書館の画像データ(京都大学附属図書館蔵一般貴重書(3-47・シ・1貴))を参照した。

『新撰京都叢書』第七卷(臨川書店 一九八四年)所収。

柴田光彦編『曲亭馬琴日記 別巻』(中央公論新社 二〇一〇年)所収。

柴田光彦「滝沢家訪問往来人名簿―早稲田大学図書館の馬琴旧蔵書―」(『文学』第三六卷三号 一九六八年)による。

『日本随筆大成』一期二所収(吉川弘文館 一九二七年)。

木村三四吾編校『後の為の記』(八木書店 一九九二年)。

『椿亭記』は紫水文庫の複製本(紫水文庫刊行会 一九三九年)によった。

- 24 月峰については、拙稿「双林寺の画僧月峰のこと―田能村竹田・頼山陽関連資料より探る―」（『語文研究』一〇三号 二〇〇七年六月一日 九州大学国語国文学会）を参照されたい。
- 25 『几童句稿』下（天理図書館善本叢書五二（八木書店 一九七九年））『書簡による近世後期俳諧の研究―『俳人の手紙』正統編注解―』日本書誌学大系七四 青裳堂書店 一九九七年）所収。
- 26 天理図書館綿屋文庫蔵写本（わ・一九八・三八）による。暁鐘成著『晴翁漫筆』卷之三（浪速叢書二一『稿本随筆集』（一九二九年）に翻刻あり）中には「又定雅その先に文化の頃。知恩院町に閑居せし傍邊の形勢を書たる戯文に云」として、『そのとなり』の本文を書き写している。
- 28 本書に跋文を寄せた土卵は、後述の通り定雅とも交流が深い人物であるので、本書の内容を定雅も知っていた可能性も高い。本文引用は『洒落本大成』第二四卷（中央公論社 一九八五年）による。
- 29 「翻刻『俳諧百家仙』」（『湘北紀要』三二号 二〇一一年）に翻刻した（画は省略）。『俳諧百家仙』は、極めて珍しく定雅の姿絵を見られる作品である。
- 30 『京都府下遊郭由緒』は『新撰京都叢書』第九卷所収。
- 31 定雅の年刊句集は多数伝存する。それらの多くは刊年が不明であるため、拙稿「定雅の年刊句集」（『連歌俳諧研究』一〇二号 俳文学会 二〇〇二年二月）にて整理し、その刊年を追求した。引用は天理大学図書館綿屋文庫『春懐俗』（わ・二一九・三八・二三）による。ほかに柿衛文庫にも所蔵される（は・九九五・二二四四）。引用は同右（わ・二一九・三八・一六）による。刊行については註31参照。
- 34 「牛王」のあと難読。解説には「牛王地社」。
- 35 祇園女御旧跡には、明治になって阿弥陀堂が創建され祇園女御が祀られていたが、平成に入り阿弥陀堂は京田辺に移され、今は尊王山祇園寺が建っている。